

聖徳太子をめぐる“絵”と“コトバ”と“儀礼”と

文化科学研究科・日本文学研究専攻 伊藤 潤

聖徳太子をめぐる“絵”と“コトバ”と“儀礼”と

文化科学研究科・日本文学研究専攻 伊藤 潤

■はじめに

本稿は、2006年9月15～16日に実施された「総研大文科フォーラム」で、稿者が行ったポスターセッションの梗概資料である。現在、この内容に関する論考（博士論文も含めて）を完全な形で発表する予定であるため、ここではそのアウトラインのみを示すに留める。

■本報告の趣旨と調査の目的

本報告では、博士論文の主要テーマである『聖徳太子講式』の調査とそれによって得られた見解の一端を扱う。

『太子講式』は、太子伝・太子伝承を背景として構成されているが、講式も太子伝も、中世における学問・注釈・文芸・芸能と関わり合いながら成立・展開したものである。つまり『太子講式』は、「講式」という法会における文芸と太子伝の交点に位置する文芸であり、中世における文学・芸能・学問・思想の様相を論じる上で格好のテーマとなりうるのである。

中世において、聖徳太子を語るという「行為」は、特別なものであり、かつ人々の間に深く結びついてきた。太子の一生を描いた宗教絵画『聖徳太子絵伝』と、それを説き語る「絵解き」＝「太子語り」を視野に入れつつ『太子講式』を見た場合、何が見えてくるだろうか。

「法会」というある種公的な場・ハレの場において語られる、もう一つの「太子語り」＝『太子講式』。『太子絵伝』と同様に、『聖徳太子伝暦』にエピソードの淵源を持ち、「カタリ」という芸能としての側面をも持ち、さらには太子御影との関係をも垣間見せてくれるのが、この「太子講式」に見られるといえるだろう。そこから、

- ・『太子講式』とは何か
 - ・『太子講式』に関わる諸要素（儀礼・芸能・絵画）
- ということを中心として、その端緒と概要を報告したい。

■講式とは

「講式」とは10世紀後半に成立した仏教儀式＝法会の一つである。

仏・菩薩・明王・天尊・諸宗派の祖師・聖人への讃嘆・祈誓・供養がその内容であり目的である。

全体は漢文体で綴られ、「講式」の式次第とともに、そこで読まれる讃嘆の章句が同居している体裁である。そのため、「典籍」という「物」の面から見た場合、法会の最中に実際に使用され、かつ式を彩る荘厳具としての役割を持ちうるといえる。

また講式には、声明・管絃といった音楽（殊に仏教音楽）が必ず附随する。舞楽までも盛り込む講式もあり、かつまた中世における諸文芸や宗教的絵画類とも関連づけられる。そのため、中世における「諸

文芸」「宗教儀礼」「諸芸能」にまたがる研究分野として、近年注目を集めており、その特異性から「法会文芸」というくくり方を立てるべきであると主張する研究者もいる。

なお講式の端緒は、寛和2年(986)に、叡山横川首楞嚴院にて源信(恵心僧都)が開いた「二十五三昧会」での『往生講式』がそれであるとされ、後の講式類における基盤となったと理解されている。

■聖徳太子講式とは

日本における仏法興隆の鼻祖である聖徳太子を讃嘆し、自余の往生を祈誓・供養する内容である。主に太子忌日とされる2月22日に「聖霊会」「太子講」が開かれ、そこで上演された。音楽との関わり深く、その一本には舞楽を盛り込んだものもある(→天王寺舞楽との関連性)。現在確認できる「太子講式」は以下の15種類が主である。

聖霊院太子講会式(五段講式)…四天王寺所伝;11世紀末~12世紀初成立・文明13(1481)写

聖徳太子講式(五段講式)…四天王寺所伝;安貞2年(1228)成立・永正12年(1515)写

聖徳太子講式(三段講式)…西大寺所伝;建長6年(1254)成立

上宮太子講式…法隆寺所伝;成立年代不明/元和9年(1623)写

聖徳太子講式(六段)…本願寺所伝;成立年代不明

太子曼荼羅講式(三段講式)…醍醐寺所蔵;建治1年(1275)成立

太子講式(五段講式)…醍醐寺所蔵;鎌倉後期写

聖徳太子講式(五段講式)…法隆寺所伝;成立年代不明・明德6年(1391)写

聖徳太子生身供式(一段講式)…高野山大所蔵;永享6年(1434)写

聖徳太子讃嘆式(五段講式)…法隆寺所伝;成立年代不明・享禄3年(1530)写

聖徳太子講式(三段講式)…勝林院所伝;成立年代・書写年代不明・室町期写、宝永6(1709)写

聖徳太子講式(五段講式)…勝林院所伝;成立年代不明・弘化4年(1847)写

聖徳太子講略式(一段講式)…広隆寺所伝;成立年代不明

志宜山法安寺太子講式(三段講式)…龍谷大所蔵;宝永5年(1708)写

如意輪講式(六段講式)…法隆寺所伝;元久2年(1205)成立

■これまでの太子講式研究のながれ

現在『聖徳太子講式』を収集・翻刻し活字化した唯一のものは、大屋徳城編纂本『聖徳太子講式集』(私刊行1921年のち1943年、『聖徳太子全集』第五巻に再収録)の存在(以降、大屋本と略)のみであるといっ
てよい。活字化ではないが、他の講式類とともに翻刻をいくつかウェブ上で公開しているのが、ニール
ス・ギェルベルク氏の「講式データベース」(<http://www.f.waseda.jp/guelberg/koshiki/datenb-j.htm>)
である。

『聖徳太子事典』(石田尚豊編集代表・柏書房1997年)、「聖徳太子講式」(阿部泰郎氏の執筆担当)で、
大屋本を基に『聖徳太子講式』の概略が説明された。執筆担当者であった阿部氏が指摘しているように、
大屋編纂本が採用した底本以外にも、諸寺院に『聖徳太子講式』が所蔵されている可能性が大いにある
典籍である。そして、そしてそれらの調査は大屋本はもとより、現今に至るまで充分になされていない。
大屋氏を別として、『聖徳太子講式』そのものを正面から扱っている先行研究は、多屋頼俊氏「聖徳太

子讃仰の文学 和讃と講式」(『聖徳太子論集』(聖徳太子研究会編 平楽寺書店 1971年)所収)、川岸宏教氏「聖霊院太子講式について」(『赤松俊秀教授退官記念国史論集』(赤松俊秀教授退官記念事業会編 同事業会出版 1972年)所収)がその先駆けであるが、『聖徳太子講式』単体を論じる論考は手薄であるという現状である。

■『太子講式』と『太子御影』

- ・四天王寺…聖徳太子摂政像(楊枝御影)…鎌倉期制作
- ・法隆寺…聖徳太子摂政像(水鏡御影)…鎌倉後期制作
→同構図(祖本同一か)。また、共に「聖霊会」の本尊として懸けたとの寺伝
- ・太子摂政御影像の希少性
→鎌倉期成立のものは、四天王寺・天王寺・達磨寺のみ。他は南北朝末～室町期。何らかの管理がなされたか。

■太子講式と太子絵伝

- ・『太子絵伝』…太子の霊威に満ちた一生を描く(伝奇的)。同図異時法(異なる年代の太子像が隣り合わせで描かれる)
- ・『太子講式』…編年体的な語りでない諸本の存在
→『太子絵伝』を以て太子の生涯を「絵解く」行為
→『太子講式』を以て太子の生涯を「表白讃嘆する」行為